

# 埋文よこはま13

財団法人 横浜市ふるさと歴史財団 埋蔵文化財センター 平成 18 年 3 月 28 日発行



## 大高見遺跡・小高見遺跡

— 縄文時代早期と中期の集落あと発見 —

### 遺跡の位置とあらまし

大高見遺跡は都筑区大丸 2・11 付近に、小高見遺跡は都筑区荏田南一丁目 7～10 付近にあります。

ここは港北ニュータウン地域の南西部に当たります。二つの遺跡は縄文時代の集落あとです。これらは隣り合っていて、大高見遺跡が丘陵の頂部に、小高見遺跡がその南西側へ緩やかに下る斜面上に位置しています。横浜市の北部では縄文時代の集落は多くが小高い台地の上にあります。両遺跡も南を鶴見川、西を鶴見川の支流である谷本川、北を同じく早淵川で囲まれた、標高 60～75m の台地上に営まれていました。

これら二つの遺跡は昭和 50 年に発掘調査が行われました。現在、ここには住宅やマンション、ショッピングセンターなどが立ち並び、港北ニュータウンの一角になっています。調査当時と現在とを比べると、大きく景観が変化しています。

両遺跡からは縄文時代早期と中期の集落あとが発見されています。港北ニュータウンの地域内には三ノ丸遺跡、大熊仲町遺跡、二ノ丸遺跡などの大きな遺跡があります。こ



勝坂式土器（大高見遺跡）



遺跡の場所

れらは住居の数が 100～300 軒以上にも及ぶ規模の大きな縄文集落あとです。大高見遺跡は縄文時代早期と中期を合わせても 22 軒、同じく小高見遺跡は 14 軒です。比較的規模の小さな集落でした。両遺跡の周囲は縄文時代の大小の集落址が密集している地域であり、遺跡が営まれていた当時はそれらの集落間に密接な関係があったことが考えられます。

両遺跡の周辺には整理作業が終了していません。報告書

が刊行されていない遺跡が多く残っています。今後の整理作業・研究の進展によって当時の様々な事柄が明らかになっていくことが期待されます。

### 縄文時代早期の集落

縄文時代早期の前半に燃糸文土器と呼ばれる土器が作られ、使われていました。器の形が大砲の砲弾に似ています。その表面に燃糸文と呼んでいる縄文の一種を転がしてつけています。燃糸文土器はいくつかの時期に分けられています。大高見・小高見遺跡からは稲荷台式と呼ばれるものが出土しました。完全な形のものはなく、破片で出ています。

燃糸文期の住居あとは四角い形の平面形をしているものが多いです。柱の穴は位置が定まっておらず、床面にバラバラに多数掘られています。柱の穴は小さな掘り込みで、割合細い柱であったことが分かります。このことから当時の住居の中を想像すると、



早期燃糸文期の住居あと（小高見遺跡）

入口を入ると細い柱がたくさん立っている状態ということになります。現代の私たちからすれば、なんだか住みにくそうですが、普段から森の中で活動していた縄文人たちにとってはたいして気になることではなかったのかもしれませんが。この時期の住居の中には炉のあとがありませんでした。土器を使った煮炊きは住居の外で行われていたとみられています。

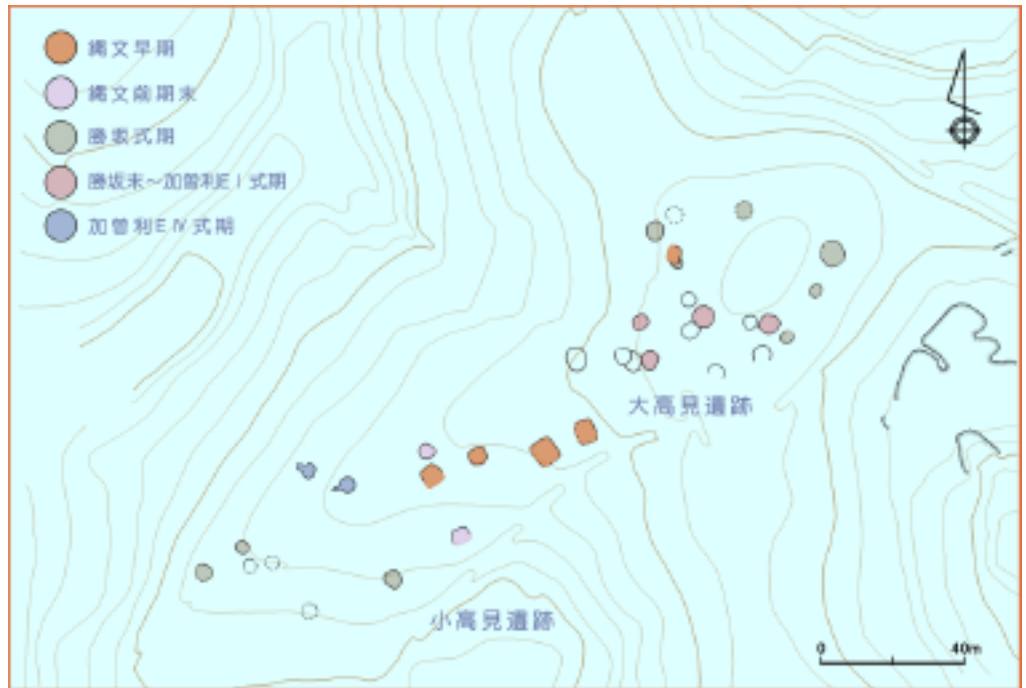
燃糸文期の住居あとからはスタンプ形石器と呼ばれるものが発見されます。これはその名のとおりスタンプ形をした石器です。クルミなどの木の实をつぶすために使われた道具と考えられています。大高見遺跡・小高見遺跡からは合計5軒の燃糸文期の住居が発見されていますが、このうち4軒からスタンプ形石器が出ています。

縄文時代早期の住居あととは小高見遺跡では尾根に沿うように4軒の住居址が並んでいます。大高見遺跡ではそこから少し離れて1軒検出されています。縄文時代早期の集落はこのように数軒程度で構成されていたようです。これらすべてが同時期に営まれていたかどうかははっきり分かりません。しかし、大高見・小高見遺跡から出ているものの特徴に共通性が見られることから、これらの住居址にそう大きな時期差はなかったと考えられます。

#### 縄文時代前期末の集落

小高見遺跡では縄文時代前期末の住居あとが2軒発見されました。おそらく十三菩提式期とみられます。

1軒は平面の形が円形です。もう1軒は四角い形をしています。発見された土器の特徴が異なることから、やや時期差があっ



大高見・小高見遺跡の遺構分布図

たようです。それぞれ単独で営まれていたことが考えられます。

#### ◆縄文時代中期の集落

縄文時代中期は約1万年続いた縄文時代の中でも、最も多くの遺構や遺物が残っている時期です。集落の規模も大きくなり、人口も増えた時期でした。この頃の港北ニュータウン地域の縄文時代の集落は甲信地方の中部山岳地帯方面との関係が深いとみられます。それは勝坂式と呼ばれる土器や、それに続く時期の曾利式と呼ばれる土器が出ていることからうかがうことができます。

勝坂式期が終わると、この地域では加普利E式と呼ばれる土器が使われます。これは勝坂式土器の分布圏（甲信地方）よりも東寄りの関東地方に分布圏をもつ土器です。大高見遺跡のJ2号住居あとからは、加普利E式土器と一緒に

同じ時期の甲信地方の曾利式土器も出ています。甲信地方を分布の中心とする土器と関東地方を分布の中心とする土器と一緒に出ていることは、大高見遺跡に暮らした人々が両方の土器の



加普利E式土器（大高見遺跡）



曾利式土器（大高見遺跡）

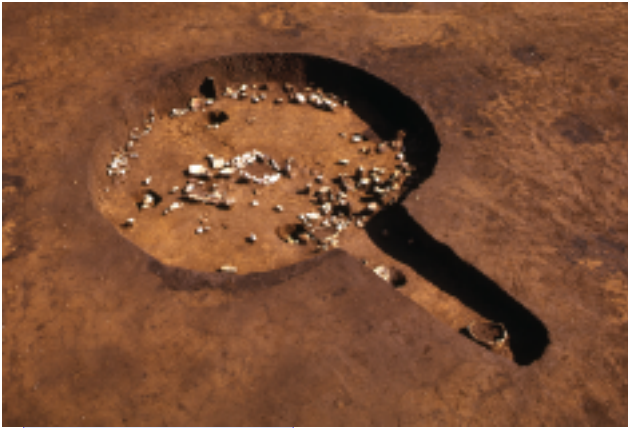


大高見遺跡J2号住居あと

文化圏の人々と交流していたことを示しています。

大高見・小高見遺跡から出土した勝坂式期の遺構や遺物はその終わり頃の時期ものが多くあります。その後続く加曾利E ~ E 式期の遺構や遺物も発見されています。その間連続して集落が営まれていたと考えられます。しかし、同時期に営まれていたと考えられる住居は多くても数軒です。近くにある大きな集落から少し離れたこの場所に数軒が建っていた、というイメージが正しいと考えられます。

勝坂式期の終わりから加曾利E式期にかけての竪穴住居をみると、しっかりと掘り込んだ住居の床面に、太い柱の



小高見遺跡J9号住居あと

穴が規則的に掘られています。住居の床面の中央付近には炉が設けられています。煮炊きも屋内で行っていました。先ほど見た縄文時代早期の住居とは大きな違いがみられます。

縄文時代中期の終わり頃（加曾利E 式期）には、小高見遺跡で「柄鏡形住居」と呼ばれる住居が2軒つくられました。これは平面形が文字通り円い鏡に柄のついた形をしていることからそう呼ばれている住居あとです。細長く張り出した柄が出入口にあたります。その張り出しは2軒とも西の方向を向いています。柄の先端部と根本にあたる部分には土器が埋められていました。小高見遺跡のJ9号住

### よりいともん 擦系文とは

縄文土器の表面には文様がさまざまな道具を用いて付けられています。それは貝がら・骨・木などです。これらを刷文具といいます。土器の表面に粘土紐を貼り付けて傷や隆線文（りゅうせんもん）、先の尖った道具で表面に凹んだ線を引き付けて付ける沈線文（ちんせんもん）などがあります。しかし、代表的な文様は縄文（じょうもん）といえます。縄文土器という名称のもとになった文様ですから、これがどのようにして付けられたのかはモースが大森岡塚を発掘して以来長いことわかりませんでした。擦り紐（よりいも）を土器表面に転がして付けることを解き明かしたのは山内清男（やまのうちのあ）でした。昭和6年のことでした。文様としての縄文にはいろいろ種類があります。彼はこれらを細かく科学的に分類し、研究しました。

縄文は木などの植物繊維に擦りをかけて作った擦り紐あるいはそれを棒軸に巻き付けたものを道具として付けられた文様をいいます。擦り紐をそのまま回転して付けたものが斜縄文（しやじょうもん）で、棒軸に巻いて転がして付けたものが擦系文（よりいともん）です。これら二つを合わせて広い意味の縄文といい、狭い意味で縄文という場合は斜縄文のことをいいます。

大高見・小高見遺跡から出ている縄文時代早期の擦系文土器の擦系文は軸の周囲に擦り紐をただ軸の周囲に巻いただけのもので、土器表面の上下に転がして付けられています。そのため縦に糸が走り、それはあたかも縄を並べて押し付けたように見えます。



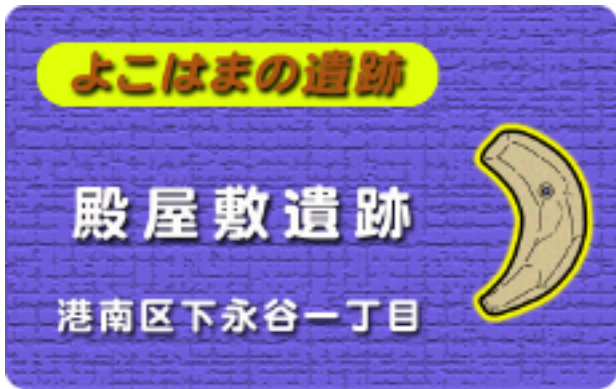
斜縄文(上)と擦系文(下)

居の床面、特に奥壁寄りには河原石が多数敷かれていました。

大高見・小高見遺跡は縄文時代中期の末で終わりを迎えます。

### お知らせ

大高見遺跡・小高見遺跡の報告書が平成17年12月に刊行されました。両遺跡について詳しく知りたい方は市内の図書館や各地の埋蔵文化財センターなどで閲覧することができます。



**遺跡の位置と地形**

どのやしき 殿屋敷遺跡群は港南区下永谷一丁目28付近にありました。

J R東海道線戸塚駅の北東約3km、京浜急行電鉄京浜急行本線上大岡駅の西約3kmに位置しています。

遺跡群は柏尾川の上流域の永谷川とその支流の芹ヶ谷川との合流点に向って北西に張り出す丘陵の先端部に営まれていました。標高は60m前後。西側を流れる永谷川との比高差は約40mです。

**遺跡の発掘**

殿屋敷遺跡群は、永谷川に北西に張り出す中ほどの西斜面のA地点、その北方向丘陵最先端の低い丘陵部分のB地点、その南西のC地点からなりたっています。

A地点では弥生時代後期久ヶ原期から弥生町期の住居あと14、古墳時代前期五領期の住居あと1が発見されています。B地点は弥生時代後期弥生町期の方形周溝墓が検出されています。これらの方形周溝墓はきわめて近く接しているにもかかわらず重複していないことから、比較的短い期間に築かれたとみられます。C地点では竪穴住居あと28とそれらを取りまく環壕が出ています。弥生時代後期久ヶ原期から弥生町期のものです。

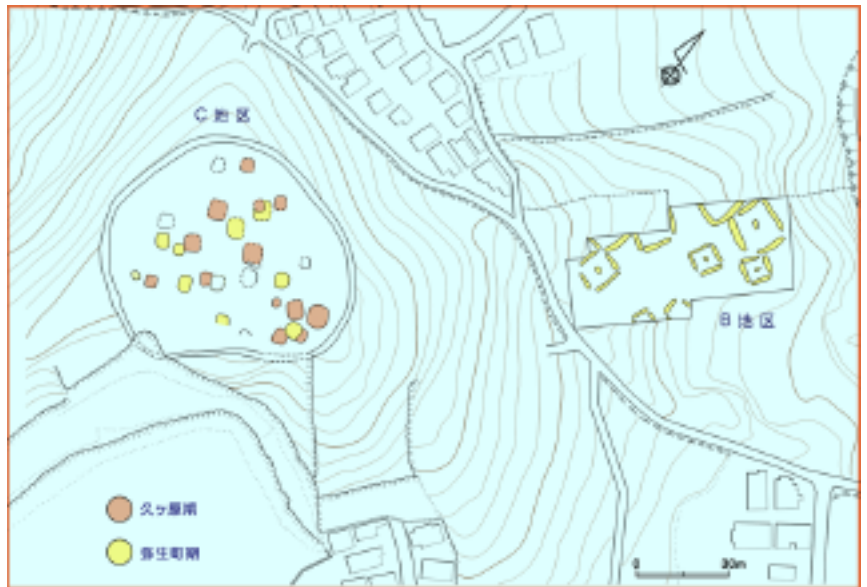
殿屋敷遺跡群は調査者によると次のよう

に移り変わったといえます。弥生時代後期久ヶ原期から弥生町期にかけてC地点の環壕集落とB地点の方形周溝墓群が一つの組み合わせとなる集落構成をしています。A地点の住居あと群はC地点の集落から分離したものと考えています。

遺跡群の周辺には永谷川を挟んで西に約600mに弥生時代後期の環壕集落そとご遺跡があります。北約1.5kmには平戸遺跡があり、弥生時代後期から古墳時代前期の住居あとと方形周溝墓が発見されています。柏尾川の西方には弥生時代後期の集落あとと前期古墳からなる東野台遺跡があります。これらの遺跡と集落の構成や墓地などを検討することによって、この地域の米作りの生活から古代国家が生まれてくる姿をうかがうことができます。



発見された弥生式土器



殿屋敷遺跡の集落と墓地

**埋蔵文化財センターのご案内**

出土品や整理作業のようすを見学できます(予約が必要です)。埋蔵文化財や歴史に関する質問も歓迎します。

開所：午前9時～午後5時。土・日・祝日休み。

交通：東横線「綱島駅」より東急バス1番乗り場「勝田折返所」行終点。田園都市線「江田駅」より東急バス「綱島駅」行「勝田」下車。

ホームページアドレス  
<http://www.rekihaku.city.yokohama.jp/maibun/index.html>

\*「埋文よこはま」は、横浜市区で発掘調査された遺跡や出土した遺物を紹介する広報紙です。

**埋文よこはま 13**

発行日 2006年3月28日  
 編集・発行 財団法人 横浜市ふるさと歴史財団  
 埋蔵文化財センター  
 〒224-0034 横浜市都筑区勝田町760  
 TEL 045-593-2406  
 FAX 045-593-2403